初期ガージャール朝とテヘラン

——宮廷の季節移動と首都⁽¹⁾——The Early Qajars and Tehran:
Seasonal Travels of the Court and the Capital City近藤 信彰^{*}
KONDO Nobuaki

ABSTRACT The purpose of this article is to examine the relations between the early Qajars and Tehran, their capital.

The development of Tehran undeniably began in the late eighteenth century, when the city was established as the capital under the Qajars. However, the relations between the early Qajars and the city have never been discussed completely. In addition, even the exact dates of the establishment of Tehran as the capital and the beginning of the Qajar rule over Iran have never been correctly mentioned in previous studies. On the other hand, some researchers claim, in the absence of substantial evidence, that since the Qajars originally belonged to Turkish tribal groups, they did not have much interest in urban areas.

The main points regarding the relations between the early Qajars and Tehran are as follows:

1. Aqa Mohammad Shah chose Tehran as his capital in the spring of 1785, when he entered the city. He brought with him artisans and builders from Esfahan to build his palace. He also brought his family from Mazandaran to Tehran. He was crowned in the spring of 1796 in Tehran, and started issuing his royal decrees after the Safavid form, which means he was enthroned as legitimate ruler of Iran.
2. It is true that the early Qajar court indulged in seasonal travels, mainly staying in Tehran during winter. However, unlike the Mongols, they spent two-thirds of the year in the capital. They always stayed in Tehran for the important occasion of Nowruz—the Iranian new year—and celebrated it by holding a ceremony. Only twice in forty-eight years did they hold this cere-

* 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授
Associate Professor, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.

mony in other places. The ceremony was based on the legend of Jamshid, the legendary Iranian king. The Qajars initiated this custom and were succeeded by the Pahlavis.

はじめに

イランの首都テヘランは今日では720万の人口を擁する中東有数の大都市である。その本格的発展が、18世紀末ガージャール朝によって首都とされたことを契機とすることは衆目の一致するところである。しかし、18世紀末から19世紀初頭に関しては史料が乏しく、初期ガージャール朝の君主達が首都に対して、いかなる政策を採ったのか、従来の研究では不明のままであった。それどころか、ガージャール朝がいかなる経緯でいつテヘランを首都に定めたのかについてすら、従来の研究は信頼しうるものではない。これは不正確な記述が横行するガージャール朝成立年代⁽²⁾と同様、研究史上の問題点であった。

しかし、近年、いくつかの初期ガージャール朝史の史料が刊行されたこと、写本や文書史料の利用が可能になったことで、この問題を解決することが可能となった。また、この問題は初期ガージャール朝の性格をめぐる議論と不可分であるが、これに関してもすでにエブラヒームネジャートによる研究が現れ、従来の説は再考を余儀なくされている。彼によれば、王朝建設の前のガージャール部は、都市に住む少数の政治的・軍事的エリートであって、部族の形態を取るの⁽³⁾はアーガー・モハンマド・ハーンによって王朝が建設される過程においてであった。したがって、彼らがアブリオリに遊牧部族の出身であるとして、これを理由に初期の建設活動の不活発さ——これも印象論に過ぎないが——や⁽⁴⁾宮廷の季節移動を説明するような議論はもはや成立しえず、再検討の必要がある。

本稿では、ガージャール朝の最初の2代の君主アーガー・モハンマド・ハーン (d.1797) とファトフ・アリー・シャー (r.1797-1834) を取り上げ、彼らと首都テヘランの関係を明らかにしたい。まず、ガージャール朝の成立に留意しつつ、首都選定の過程を明らかにし、さらに、宮廷の季節移動がいかに行われたかを示し、先行王朝のそれと比較したい。サファヴィー朝の宮廷の季節移動や首都に関しては、すでにいくつかの研究があり、これと比較することで、初期ガージャール朝の性格の一端が明らかとなると考えられる。

I. テヘランへの入城と首都選定

いくつかの先行研究はアーガー・モハンマド・ハーンによる首都決定の具体的な年代を挙げている。たとえばミノルスキーやラムトン、カルマールは首都決定を1200/1786年の出来事とする。ミノルスキーの論拠はブリッジズのペルシア語年代記 *Donboli* の英訳である。⁽⁵⁾ ペルシア語原本の対応する部分は、従来の19世紀初版の刊本では欠落しているが、大英図書館の写本に基づく新しい翻刻本によれば以下になる。⁽⁶⁾

翌1200年、テヘランを首都 (maqarr-e asās-e salṭanat) と定め、そこで王者の建築物の修理に着手した。エスファハーンからマラーエルに赴き、エスマイール・ハーン・フェイリーからの上申書と進物が届いた。そこから、ハマダーン方面に赴き、コルデスターン総督ホスロウ・ハーンが進物を送り、恭順を表明した [*Donboli* 27]。

しかし、後述するようにエスマイール・ハーンやホスロウ・ハーンの服従は実際には1199/1785年、テヘラン征服の直前に行われており、前後の事件も一年ずつずれていることから、⁽⁷⁾ 正確にはテヘランを征服した1199/1785年のことを指していると考えられる。

さらに、ハンブリーらは1200年ジョマーダー1月11日/1786年3月12日という日付を挙げている。⁽⁸⁾ たしかに、史料 *Rowzat al-Ṣafā* には以下のような記述があり、⁽⁹⁾ 先述のラムトンの論拠ともなっている。

幸いなる預言者のヒジュラ1200年の勝利のノウルーズに——この祝日はジョマーダー1月11日にあたったが——世界征服者たる王、勝利の印したる君主、アーガー・モハンマド・ハーン・ガージャール・ゴユンルー陛下は王都テヘランで、支配者の玉座、王の位に着かれた。そして、古来より継承した貨幣 (sekke) とフトバが、新たに、新しい輝きを得た [*Rowzat al-Ṣafā* 9: 200]。

19世紀後半に成立した年代記 *Fehrest* や *Montażem*、地誌 *Mer'at* や *Fārsnāme* の記述は基本的にこれをなぞったものと考えられる。⁽¹⁰⁾ しかし、この記述はテヘランの首都決定を直接的に示すものではない。そもそも、1274/1857年に完結した *Rowzat al-Ṣafā* は同時代史料とは言えない。小牧昌平が指摘するように、この史料にはアーガー・モハンマド・ハーンの即位に関して3度の異なった記述

があり、引用部分はその2番目に当たる。⁽¹¹⁾

アドル & オルカドはこのような諸研究の混乱を意識してか、「首都」という概念があまりに曖昧であるため、テヘランの首都決定に関していくつかの年代を示さざるをえないとし、2次史料に基づいてそれを実行している。本稿では、⁽¹²⁾
(a)アーガー・モハンマド・ハーンのテヘラン入城、(b)1786年の「即位」、(c)1796年の即位の3点に分け、より成立の早い叙述史料でこれを検討する。アーガー・モハンマド・ハーンに関する最も重要な史料は、ザンド朝のそれをのぞけば1211/1796-7年に完成した *Mohammadi* および1244/1829年に成立した *Molk-ārā* ⁽¹³⁾である。

(a) アーガー・モハンマドのテヘラン入城

両史料の内容は大筋で一致する。1199/1785年春、ザンド軍がエスファハーンからシーラーズへ撤退し、アーガー・モハンマド・ハーンはエスファハーンに入城した。その後バフティヤリー勢力を破り、エスマーイール・ハーン・フェイリーやホスロウ・ハーン・アルダラーンを服属させたのち、ハマダーンを経由して、テヘランへ入城した。大きな相違としては、前もってテヘランに派遣されこれを攻略した軍司令官マジュヌーン・ハーン・パーズーキーの名前および彼の活躍に関する記述が *Molk-ārā* には詳細に書かれているのに対し、*Mohammadi* には全く見られないことがある。また、*Molk-ārā* はシャッヴァール月27日/9月2日をテヘラン入城の日付とするが [118a], *Mohammadi* はこれをハマダーンからテヘランへ向けて出発した日付としている。⁽¹⁴⁾

注目すべきは両史料に共通している記述であるが、アーガー・モハンマド・ハーンは当初からテヘランを首都 (*maqarr-e asās-e soltāni*, *maqarr-e eyālat* *va markaz-e khelāfat*) にすることに決めており、さまざまな建物を建設するために、エスファハーンを出発する際に多数の技師や職人、建築師を同行させたという事実である [*Mohammadi* 151-152; *Molk-ārā* 117a]。テヘランを首都に選んだ理由として、*Mohammadi* はそれまでに占領した諸地方の中心にあることを挙げ、*Molk-ārā* もエラーク (イラン高原中部) とタバレストーンの間にあること、他に有力な権力者がいなかったことを挙げる。従来の研究は *Rowzat al-Ṣafā* やマルコム『イラン史』に従って、彼の根拠地アスタラーバードに近いことを強調していたが [*Rowzat al-Ṣafā* 9: 197; *Malcolm* 2: 131], 同時代史料の説明はややニュアンスが異なるのである。テヘラン占領当時の状況を考え

れば、当時の彼の最大の敵はシーラーズを本拠とするザンド朝であり、エスファハーンが最前線となっていた。一方、彼の軍は主にマーザンダラーンやアスタラーバードから調達されていた。とりあえず、当時押さえていた地域の中心として、テヘランを根拠地を選んだと考えられる。

また、*Molk-ārā*によれば、アーガー・モハンマド・ハーンは自らの母らマーザンダラーンからすべてのハレム関係者をテヘランに呼び寄せたという [118a]。史料に拠る限り、翌年のノウルーズまで半年余り、アーガー・モハンマド・ハーンがテヘランを離れた形跡はない。

以上のことから、アーガー・モハンマド・ハーンはテヘラン入城の時点から、ここを本拠地とする意志を固めており、宮殿の建設やハレムの移動などに着手したと考えられる。先述の *Donboli* の記述は、明らかにこのことを指していたのである。

(b) 1200/1786年ノウルーズの「即位」

Rowzat al-Ṣafā に採用されているこの即位の記述は *Moḥammadi* には全く存在せず、代わりに通常のノウルーズの記述がある。⁽¹⁵⁾これに対して *Molk-ārā* には同じ日付で即位およびフトバと貨幣打刻の記述があり [121a-122a], *Rowzat al-Ṣafā* はこれに倣ったと考えられる。史料の成り立ちを考えれば *Moḥammadi* の方がより重要であり、また、ザンド朝史料にも関連した記述はない。また、貨幣史料ではすでにこれ以前の1199/1784-5年にエスファハーンで打刻された銀貨が存在し、これが最初でないことが判明する。さらに、この午年のノウルーズの日付も、他の史料ではジョマーダー 1 月 11 日ではなく、同月 19 日 / 3 月 20 日 (*Golshan* 714; *Moḥammadi* 155) であり、こちらの方が正確である。⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾

また、別の史料にはアーガー・モハンマド・ハーンがテヘラン入城後 1205/1791 年以前に、サファヴィー朝の末裔であるソルターン・モハンマド・ミールザーをテヘランへ招聘しようとつとめことも記されている [*Favā'ed* 98]。⁽¹⁸⁾⁽¹⁹⁾この時点ではアーガー・モハンマド・ハーンも、依然、ザンド朝同様、シャーの称号を帯びて即位することに躊躇があり、サファヴィー朝の傀儡を立てるという方策も考慮していたと考えられる。

ただし、この時点でアーガー・モハンマド・ハーンがイランの支配者と見なされていた可能性は高い。ゴレスターン宮殿博物館にあるは 1200 年ズィーヘッジェ月 / 1786 年 10 月の日付をもつ売買契約文書は、彼の名前に「彼の王位と権

威を永久たらしめたまえ」という祈願文が伴っている [Golestān no. 4246]。また、翌1201年ズィーヘッジェ月／1787年9月の売買契約文書においては同様の祈願文のほか、「スルタン (solṭān) の子であるスルタン、可汗 (khāqān) の子である可汗」という形容が彼に附されている。さらに同文書にはテヘランに対して首都を示す「スルタンの都 (dār al-salṭane)」という言葉が附されている [Golestān no. 3028]。遅くとも1787年までには、文書史料においてもテヘランは首都と呼ばれるようになったのである。

(c) 1210/1796年の即位

Moḥammadī が示すアーガー・モハンマド・ハーンの即位は、1210/1796年春のものである。この年アーガー・モハンマド・ハーンはグルジア遠征を終え、ホラーサーン遠征を決意し、アゼルバイジャンのハルハールでノウルーズを過ごした。ガージャール部諸族の長達は幾度もアーガー・モハンマド・ハーンに即位をするよう勧めたが、彼はなかなか承知しなかった。しかし、ついに承知し、勅令を発して各地の知事や高官をテヘランへ招集した。テヘランへ到着後、ウラマーや軍人・高官が立ち並ぶなか、王冠をつけ、玉座についたという。ただちに国中のモスクで彼の名前でフトバが読み上げられ、彼の名前で金貨や銀貨が打刻された [*Moḥammadī*, 282-284]。即位の日付は記録されていないが、テヘランに到着したシャッヴァール月18日／4月26日からホラーサーンへ出発したズィーガアデ月17日／5月24日の間に行われたことになる。*Molk-ārā* の記述は前年までで終わっているため、この史料に記述はないが、成立年代の遅いいくつかの史料もこの即位に関する記述を継承している [*Donboli* 30; *Ṣaḥeb-qerānī* 33b; *Eksir* 49; *Nāsekh* 80; *Rowzat al-Ṣafā* 9: 274; *Fehrest* 321]。

貨幣史料を見てみると、この日付より前の1209/1794-5年からアーガー・モハンマド・ハーン⁽²⁰⁾の現存する金貨、銀貨が急増し、この即位の記述を画期とすることはできない。しかし、この即位は勅令の書式から確認することができる。1210年シャッヴァール月以前のアーガー・モハンマド・ハーン⁽²¹⁾の勅令はその印章が文書の末尾、左下に押されている。これはザンド朝のものと同一様式である。ザンド朝は当初サファヴィー家の傀儡を立てたこともあり、決して「シャー」を名乗らず、臣下のものと同様文書の末尾に押印したのである。

これに対して、1211年モハッラム月／1796年7月以降のアーガー・モハンマド・ハーン⁽²¹⁾の勅令は、サファヴィー朝やアフシャール朝同様、上部中央に押印

されている。⁽²²⁾したがって、勅令の書式の上でもアーガー・モハンマド・ハーンが臣下ではなく、サファヴィー朝等と並ぶ確乎とした王朝を建設したことが示されている。そして、その様式の変化が年代記の記すこの即位の時点と見事に一致する。

さて、2 次文献の中には即位がモガン平原で行われたという説も多いが、⁽²³⁾ペルシア語史料にそのような記述を見つけることはできない。1200/1786年ノウルズの「即位」の記述も含めて、テヘランで即位したことで、ペルシア語諸史料は一致している。これもまたテヘランの首都性を示すものである。

これまでの検討により、アーガー・モハンマド・ハーンがテヘランを本拠に選んだ時点として1785年9月、正式の即位の時点として1796年の4 - 5月が妥当である考えることができる。通説の1200/1786年のノウルズはいずれの日時としても不適当であるといわざるをえない。⁽²⁴⁾ただし、19世紀後半以降の史料が、アーガー・モハンマド・ハーンがテヘランで過ごした最初のノウルズを重視するのには、それなりの理由がある。それについては3章で述べたい。

II. 夏営と冬営

遊牧国家の特徴として夏営地と冬営地との間の宮廷の季節移動が挙げられる。たとえばイル・ハーン朝期には宮廷は遊牧地である夏営地と冬営地の間を季節移動し、既存の都市には春や秋に立ち寄る程度であった。⁽²⁵⁾また、サファヴィー朝においても首都エスファハーンは王の冬の滞在地に過ぎなかったとも言われ⁽²⁶⁾る。それではガージャール朝の場合はどうであったのであろうか。先行研究が述べるように、春や夏はほとんどテント生活を送り、首都は顧みられることはなかったのだらうか。⁽²⁷⁾

テヘラン入城後のアーガー・モハンマド・ハーンの足跡をたどってみると、暗殺されるまでの12年間で夏季にテヘランで過ごしたことは一度もないことが判明する。これに対して冬季は8回、テヘランで過ごしており、この町が主に冬の滞在地であったことが明らかになる。ファトフ・アリー・シャーの場合も、もっとも詳細な同時代の年代記 *Zā al-Qarneyn* を検討してみると、その在位中の37年間のうち、病気がちであった最晩年の3年を除けば、テヘランで夏季を過ごしたことはない。一方冬季に関しては計30回がテヘランである。夏営

(yeylāmishī), 冬営 (qeshlāmishī) というモンゴル語起源の術語やソルターニーエ、ウージャーン、ゴンデマーンという古くからの夏営地の利用は、一見、⁽²⁸⁾ ガージャール朝が遊牧政権の伝統を継承しているかのように見える。

ところが、子細に検討してみると興味深い事実が浮かび挙がってくる。第一にテヘランの滞在期間が比較的長いことである。テヘラン発着の日付がすべてわかっているわけではないが、アーガー・モハンマド・ハーンの場合、テヘランに冬営した場合は8ヶ月前後滞在する場合が多い (1785-86; 1787-88; 1789-90) [Moḥammadi 152, 189; Molk-ārā 128b, 139b; Golshan 780]。また、マーザンダラーン、アスタラーバードに冬営した1793-94年でも、冬営前の2ヶ月弱、冬営後の2ヶ月強、計4ヶ月は滞在している [Moḥammadi 225, 228, 232, 239]。イラン統一にむけての軍事行動のゆえにテヘランにあまり留まらなかったという説は正しくなく、⁽²⁹⁾ 軍事行動の傍ら、テヘランにも一定期間滞在していたのである。ファトフ・アリー・シャーの場合も、テヘランを冬営地とした場合には、おおよそ8ヶ月から9ヶ月は滞在し、冬営地としない場合も5ヶ月から7ヶ月滞在していることがわかる。テヘランは、季節移動の合間に立ち寄る場所でも、単なる冬の滞在地ではなく、一年の3分の2を過ごす都市であったのである。

次に宮廷の季節移動と政治・軍事的要因の密接な関係である。ガージャール朝初期には地方平定のための遠征やロシアとの戦争など、多くの軍事作戦が行われた。アーガー・モハンマド・ハーンの遠征を調べてみると、すべての遠征が夏季に行われていることがわかる。冬季は休息の期間であり、この間には各地から招集した軍をそれぞれの故郷に帰していた [Moḥammadi 170]。イランの統一という課題を負っていた以上、毎年春には軍を招集し、遠征先に出陣し、その途中で夏営するという形を取っていたのである。

より、明確にわかるのはファトフ・アリー・シャーの事例である。たとえばイル・ハーン朝時代からの夏営地ソルターニーエは、彼の夏営地としても有名であるが、利用したのは治世の全37夏中13夏にすぎず、イル・ハーン朝のオルジェイトやアブー・サイードに比べてその割合はかなり低い。⁽³⁰⁾ しかも、夏営地として定着するのは第一次イラン・ロシア戦争の開始後である [Zū al-Qarneyn 196]。カラバグやアルメニア、アゼルバイジャン北部が戦場となったこの戦争も冬季にはほとんど戦闘行為は行われず、毎年、春から秋にかけて行われた

が、ファトフ・アリー・シャーも、この間、毎年ソルターニーエまで赴き、ロシア軍の侵攻に備えていた。そして、第2次イラン・ロシア戦争の終結後はソルターニーエを利用していない。一方、ホラーサーン方面で治安上の問題がある場合には、遠征軍を派遣し、自らは同方面の夏営地で夏営を行ったことがわかる。⁽³¹⁾そして、特に遠征の必要のない年は以下のものであった。

この年(1838年)、神に護られた王の諸地方の周辺には、勝利をもたらす軍旗の出立の必要となるような事柄がなかったため、もっとも偉大なるサーヘブ・ゲラーン陛下(=ファトフ・アリー・シャー)は旅に出ることを取りやめられ、シェミーラーンや近所の夏営地で狩猟をして過ごされた [*Zū al-Qarneyn* 578]。

また、次の年(1839年)にはソルターニーエで夏営したが、その説明は以下の通りである。

勝利の軍勢が出立しなければならないような事柄は諸地方の周辺にはなかったが、前年カリフの都(テヘラン)で過ごされたため、先見の明がある王のなかの王は、軍勢を整えるため、遠征に出立された [*Zū al-Qarneyn* 592]。このように、その時々政治的、軍事的な事情により、夏営地は決定されていた。特に遠征や軍事演習の必要がなければ、テヘランの近郊で夏を過ごすこともあったのである。

それでも、テヘランの夏を避けなければならなかったのはなぜだろうか。その理由は、主に気候条件にあったと考えられる。1796年にテヘランを訪れたオリヴィエによれば、テヘランは特に夏季は気温が高く、空気がよどみ、疫病が発生するなど、耐え難い状態であった。宮廷のみならず、一般住民も、貧民や避けることのできない用事のあるもの以外は、夏季には周囲の村に避暑に行くのが通例であった。テヘランに留まらなければならないものも、妻子を周辺の村へ送ったのである [*Olivier* 91]。キンネイも1813年発行の著書のなかで、テヘランの夏季の猛暑に言及し、テヘランの7月から9月の人口は1万人以下であるのに対し、冬には6万人にも達したとことを述べる [*Kinneir* 119]。⁽³²⁾このような条件では、宮廷が夏季にテヘランにとどまるという選択肢はほとんど有り得なかったのである。

もちろん、ガージャール朝の君主たちがトルコ系の遊牧民の子孫であり、それまでのトルコ・モンゴル系の諸王朝のさまざまな慣習をある程度継承してい

たことは確かである。ソルターニーエにおける夏営の図などを見ればモンゴル時代を彷彿とさせるものがある。⁽³³⁾しかし、少なくとも彼らの宮廷の季節移動を遊牧的要素からのみ説明する必要はなく、夏営地と冬営地の移動の途中に都市に立ち寄るというモンゴル時代の形式とは大きく異なることは明らかである。

III. ノウルーズ

実は冬季以上に、初期ガージャール朝の君主がテヘランに確実に滞在する時期があった。それは、イランの新年にあたる春分の日、ノウルーズである。アーガー・モハンマド・シャーの場合、テヘラン入城後の12年間のうち、11回はテヘランでノウルーズを迎えている。マーザンダラーンやアスタラーバードで冬営した1203/1789年および1208/1794年、シーラーズで冬営した1209/1795年も、ノウルーズまでにはわざわざテヘランに帰還しているのである [*Mohammadī* 239, 263; *Molk-ārā* 136a]。唯一の例外は1210/1796年のノウルーズであり、グルシア遠征のあとアゼルバイジャンのハルハールでノウルーズをすごし、約1ヶ月後、テヘランに帰還したあと、先述の即位式を行った。

ファトフ・アリー・シャーの場合も、⁽³⁴⁾1212/1798年のテヘランにおける正式の即位を含め、治世37年のうち36年、テヘランでノウルーズを迎えた。マーザンダラーンで冬営した1218/1803年と1233/1818年、カーシャーン等イラン中部で冬営した1225/1810、1226/1811、1229/1815、1231/1816、1235/1820の各年もノウルーズにはテヘランに戻っている [*Zū al-Qarmeyn* 179, 310, 379, 416, 470, 511]。唯一の例外は、1245/1830年であり、これは、第2次イラン・ロシア戦争に敗北した直後のこの時はロレスターンのホッラマーバードに滞在し、新年の祝賀を催した。このとき、テヘランでは穀物が余り、商品は諸国からもたらされず、町は荒廃してしまった。そのため、テヘランの住民の長たち全員がホッラムアーバードに赴き、シャーにテヘランに戻るよう直訴したという [*Zū al-Qarmeyn* 752-753]。ノウルーズの際にテヘランにシャーが滞在することが慣例となっており、首都テヘランの経済もこれに依存していたことがわかる。回数を比較してみれば明白であるが、テヘランは冬営地である以上にノウルーズの祝賀を執り行う都市であったのである。

それではノウルーズはシャーにとってどのような意味を持っていたのであろうか。祝賀の宴、高官・軍人との謁見、賜衣の授与、官職の授与、一般住民の

参賀などが想定されるが、その中で重要なのはやはり儀礼的側面であろう。ノウルーズはしばしばイラン古来の伝説の帝王、ジャムシードと結びつけられ⁽³⁵⁾る。17世紀半ばにデカンで著されたペルシア語辞典によれば、ジャムシードは太陽が春分点に達した日に、宝石をちりばめた玉座を高いところに据えて、やはり宝石で飾られた王冠を頂いた。太陽が昇ると日の光が玉座と王冠に差し、あたりはまばゆい光に覆われた。彼はこの日を大いに祝い、この日をノウルーズと名付けたという。フェルドウスィーの『王書』には以下のようにある。

王の栄光に相応しい玉座を作った いかほどの宝石をちりばめたことか
悪魔が持ち上げることを望んだとき 大地から天空まで持ち上げた
太陽のように宙で輝いて 支配者たる王はその上に座した
世界の人々は彼のその玉座に集い 彼の幸運に驚嘆した
ジャムシードに宝石を振りかけ この日をノウルーズと呼んだ⁽³⁷⁾

これに対して、ファトフ・アリー・シャー期の年代記は次のように述べる。

(1226/1811年) 運命のごとき強い力を持つサーヘブ・ゲラーン陛下（ファトフ・アリー・シャー）は「太陽の玉座」の上に世界を照らすノウルーズの着座 (jolūs) を行い、繰り返し述べられた祝宴の様子により、ジャムシード王のさまざまな物語への興味を失わせた [*Zū al-Qarneyn* 321]。

これは一例にすぎないが、この史料は、年初の記述でシャーの着座に関して述べるのが通例である。ノウルーズの儀礼のなかで、最も重要なのがこの着座であることを示している。また、ファトフ・アリー・シャーが新年の着座を行わなかった年が二度あるが、その際には以下のように記す。

(1220/1806年) 公正で敬虔なシャーのなかのシャーは、その清浄なる天性が預言者達の長（＝ムハンマド）様の一族への忠誠とともにあったため、着座すべき玉座に足を掛けらなかった [*Zū al-Qarneyn* 321]。

これはイマーム・フサインへの哀悼を行うべきモハッラム月とノウルーズが重なったためであった。⁽³⁹⁾

1818年にテヘランを訪れたイギリス人旅行者ポーターは、彼自身が感動を持って体験した宮廷のノウルーズの儀礼について詳細に報告している。その最も重要な儀礼は、ノウルーズ当日に高官やウラマー、皇子が宮殿に参列し、厳粛な雰囲気の中数多くの宝石を身につけたシャーが謁見の間に入ってきて、大理石の玉座に着座し、ウラマーや天文学者の発語ののち、シャー自身が荘厳な

声で新年の祝賀を述べることにあった [Porter 324-329]。ポーターは十分に説明していないが、19世紀後半のナーセロッ・ディーン・シャー時代に関する回想録⁽⁴⁰⁾と比較すると、シャーは着座して、太陽が春分点に達する時刻を待ち、天文学者が時刻になったことを告げたのち、祝賀を述べたと考えられる。

ポーターもまたこの儀礼の起源として、ジャムシードの伝説を説明するが、見落としてはならないのは「ジャムシードはこの儀礼の場所として、首都を定めた」としている点である [Porter 317-318]。当時、ノウルーズの儀礼が首都で行われるものと考えられていたことを示している。

また、着座する玉座に関しても史料には興味深い記述がある。先に引用した1226/1811年の記述にあらわれる「太陽の玉座 (Takht-e Khorshid)」はファトフ・アリー・シャーがエスファハーンで10万トマーンを投じて製作させたもので、1216/1802年のノウルーズより儀礼に用いられた [Zū al-Qarneyn 163]。別名「孔雀の玉座 (Takht-e Tā'ūs)」と呼ばれるこの玉座は、しばしばファトフ・アリー・シャーの肖像画に現れる、数多くの宝石をちりばめた豪華絢爛たる平台状のものであった⁽⁴¹⁾ (図1)。もちろん、ジャムシードの伝説に倣ったことは疑いない。ただし1227/1813年からは主に「大理石の玉座 (Takht-e Marmar)」別名「ソロモンの玉座 (Takht-e Soleymāni)」が用いられ、ポーターもこれを確認している。これは周囲に凝った彫刻を施した大理石製の平台状のもので、今日もゴレスターン宮殿の正面のテラス状の大広間 (=Eyvān-e Takht-e Marmar)⁽⁴²⁾ に据え付けられている (図2)。この玉座の変更の理由は防犯上のものであったとされるが、とにかく、大理石製の備え付けの玉座を置いたことで、ノウルーズの着座とその後の高官および一般の参賀を受ける装置が整ったといえよう。以後、パフラヴィー朝時代までこの玉座は用いられた。ノウルーズの儀式は首都で定められた玉座を用いて行う必要があったのであり、シャーがノウルーズの際に必ずといっていいほどテヘランに滞在したのも当然であったのである。

以上のことから、後代の史料がテヘランにおける最初のノウルーズ (1786年) をアーガー・モハンマド・ハーンの即位と考えたのも無理のないことであったと言えよう。

図1 「太陽の玉座」に着座したフアトフ・アリー・シャー (1812-3年)

出典：L. S. Diba & M. Ekhtiar (ed.) *Royal Persian Paintings: The Qajar Epoch, 1785-1925*, New York, 1998, 175.

図2 「大理石の王座」と大広間 (1840年) Frandini/Coste.

出典 : Sāzmān-e Joghrafiyā-i-e Niru-ye Moṣallāh, *Majma'-e Āsar-e Me'mārī-e Sonnat-e Irān: Dowrān-e Eslāmī*, Tehran, 1374Kh, pl. 61.

IV. 先行王朝との比較

このようなノウルーズにおける首都へのこだわりは、イランの諸王朝が歴史的に持ち続けていたものなのであろうか。サファヴィー朝のシャー・タフマースプ (r. 1524-1576) とガズヴィーンに関する平野豊の研究やシャー・アッバース (r. 1587-1629) の旅程に関するメルヴィルの研究においても、ノウルーズへの言及は見られず、重要なのは冬营地であるという印象である。⁽⁴³⁾

また、バーバーイーはエスファハーン遷都以降の、アッバース、サフィー、アッバース 2 世という、3 代のサファヴィー朝君主のノウルーズの滞在地を調べている。⁽⁴⁴⁾ アッバースに関しては、年代に混乱が見られるため最近の後藤裕加子の論文や史料と合わせて見る必要があるが、メルヴィルによってエスファハーン首都時代とされている1598年から1611年の14年間を見ても、アッバースがエスファハーンでノウルーズを過ごしたのは、わずかに6回に過ぎない。また、サフィーに関しても、1629年から1642年の14年間で、わずかに5回である。アッバース 2 世については、バーバーイーの表は新たに公刊された史料 *Khold-e Barin* を利用することによって、大きく書き換えられる。1643年から1666年までの24年間で18回のノウルーズ時の首都滞在がある。バーバーイーが述べるように、アッバース 2 世はそれまでのサファヴィー朝君主以上にエスファハーンに滞⁽⁴⁵⁾在し、多くの建設活動を行ったのではあるが、ノウルーズの首都滞在に関していえば初期ガージャール朝の君主には及ばないのである。⁽⁴⁶⁾

最後にザンド朝のキャリーム・ハーン (r. 1765-1779) について調べても、史料 *Golshan* で明確に把握できる1756年から1768年までの13年間でノウルーズに首都シーラーズに滞⁽⁴⁷⁾在したのは7回である。不明の年を全部シーラーズであると仮定しても1756年から1778年の23年間で最大15回であり、依然初期ガージャール朝の君主には及ばない。ガージャール朝君主のノウルーズにおけるテヘラン滞⁽⁴⁸⁾在へのこだわりは、先行諸王朝には見られないものである。

おわりに

本稿の検討で明らかとなった点は以下の通りとなる。

1. アーガー・モハンマド・ハーンのテヘラン首都決定は1785年の入城時、正式な即位は1796年であり、後者は勅令の形式からも裏付けられる。

2. 初期ガージャール朝の宮廷は季節移動を行ったが、モンゴルのそれとは違い首都テヘランに滞在する期間が年の3分の2程あった。テヘランは単なる冬営地ではなく、ノウルーズの儀礼を行う首都であり、冬営地が別の場所であってもシャーはノウルーズにはテヘランに滞在した。ノウルーズの儀礼は明らかにジャムシードの故事に倣ったものであり、ファトフ・アリー・シャー期には玉座などの装置も整えられた。

3. ノウルーズの儀礼を首都に限る例はサファヴィー朝やザンド朝などの先行王朝には見ることができず、ガージャール朝の創始であると考えられる。

従来はガージャール朝がトルコ系の部族の出身であることが強調される傾向にあった。しかし、本稿で示したようにガージャール朝君主が先行王朝以上に首都にこだわり、また、ジャムシードのような古代イラン的なモチーフを積極的に導入したこともまた、事実である。後者に類似した事例としてはファトフ・アリー・シャーの命で製作されたレイのチャシュメエ・アリーの古代イラン風のレリーフ⁽⁴⁷⁾を挙げることができよう。そして、こうした流れはパフラヴィー朝のイラン主義の先駆をなしたと言える。レザー・シャーやモハンマド・レザー・パフラヴィーの即位式に際しても、ファトフ・アリー・シャーが製作させた玉座の一つが利用されたのである。

初期ガージャール朝君主のノウルーズと首都テヘランへのこだわりは、結果として急速な首都の発展を促した。1796年の時点でオリヴィエは首都となったテヘランの発展を予見していた [Olivier 90-91]。デュプレによれば当初は8千から1万人であった人口が、彼が訪れた1808年までに4万5千人から5万人に増加したという [Dupr 189-190]。1818年に訪れたポーターは冬の人口は6万から7万であるが、ノウルーズにはさらに大量の人々が流入したと述べる [Porter 312]。1812年にテヘランを訪れたシーラーズ出身のミールザー・サーレフの言は以下の通りである。

テヘランにいるほど大勢の人々は他の地方にはいない。テヘランにはこれほどのバーザールがあり、あらゆる職種の人々に出くわす。テヘランほど繁栄している地方はイランにはない [Sleh 31]。

テヘラン発展の基礎はまさに初期ガージャール朝によって築かれたのである。

注

- (1) 本稿は日本中東学会第20回年次大会（2004年5月9日，於：明治大学）における報告の一部を加筆訂正したものである。
- (2) ガーシャール朝の成立年代に関する問題提起として，小牧昌平「ザンド朝の成立過程について」『上智アジア学』5（1987），43。同氏の以下の学会報告では，この問題の検討がなされたが，この部分は活字化されていない。小牧昌平「カーシャール朝の成立事情についての一考察」日本オリエント学会第30回大会報告，1988年11月13日。この報告のハンドアウトをいただき，また，貴重な資料をお貸し頂いた小牧昌平先生に感謝いたします。
- (3) H. Ebrahimnejad, *Pouvoir et succession en Iran: le premier Qājār 1726-1834*, Paris, 1999.
- (4) たとえば，M-R. Moghtader, “Téhéran dans ses murailles (1553-1930),” in Ch. Adle & B. Hourcade (ed.), *Téhéran: Capitale bicentenaire*, Paris/Tehran, 1992, 41-42.
- (5) V. Minorsky cv. Teheran in *the Encyclopedia of Islam*, the First Edition vol. 4, 716; A. K. S. Lambton, c. v. Kādjar in *The Encyclopaedia of Islam*, New Edition, vol. 4, 391.; J. Calmard cv. Tihrān; 3. the Growth of Tihrān (b) Urbanization, monuments, cultural and socio-economic life until the time of the Pahlavis, in *The Encyclopaedia of Islam*, New Edition, vol. 10, 490.
- (6) H. J. Brydges (tr.), *The Dynasty of the Kajars*, London, 1833, rep. New York, 1973, 18.
- (7) これらの事実関係については，小牧昌平「18世紀末イランの諸群雄——カーシャール朝前史の基礎データ」『上智アジア学』8（1990），78-92参照。
- (8) G. R. G. Hambly, “Āghā Muḥammad Khān and the Establishment of the Qājār Dynasty,” in P. Avery et al. (ed.), *The Cambridge History of Iran*, vol. 7, Cambridge, 1991, 118. Moḥsen Mo‘tamedī, *Joghrafiyā-ye Tārikhi-e Tehrān*, Tehran, 1381Kh., 65; Mas‘ūd Nūrbakhsh, *Tehrān be Revāyat-e Tārikh*, Tehran, 1381Kh., 174.
- (9) ただし，Lambton は首都決定のみを認め，即位に関しては *Rowzat al-Ṣafā* の誤りであるとする。
- (10) *Fehrest* 299; *Montażem* 1398; *Mer’at* 848; *Fārsnāme* 634. *Montażem* の史料系統に関する指摘は小牧「成立事情」においてすでになされている。なお，J. Perry は *Montażem* を論拠に1203/1788-9年を即位の年代とするが，そのような記述は校訂本には見られない。J. Perry, cv. Agā Moḥammad Khān Qājār, *Encyclopaedia Iranica*, vol. 1, 603. 1788年に首都決定がなされたとするエッテハーディーエの論拠も不明。M. Ettehadiéh Nezam-Mafi, “The Emergence of Tehran as the Cultural Centre of Iran,” in Adle & Hourcade (ed.), *Téhéran*, 127.
- (11) 小牧「成立事情」。

- (12) Adle & Hourcade (ed.), *Téhéran*, 7-8. この部分はあまりに多くの誤りを含んでいるため、以下、検討の対象からはずす。
- (13) アーガー・モハンマド・ハーンに関して 2 番目に重要なこの史料については、Jamshid Qāsemī, “Tārikh-e Molk-ārā,” *Ketāb-e Māh: Tārikh va Joghrafiyā* 77/78 (1381Kh.), 16-21. 管見の限りこの史料を利用した研究はない。
- (14) *Moḥammadi* 152. *Rowzat al-Safā* はこの両方を採用しているが、同日中にハマダンからテヘランに移動するのは、当時では困難である。
- (15) 同様にこの即位の記述を含まないものとして、*Donboli* 27; *Šāhebqerāni* 17a-17b; *Nāsekh* 50-51. *Nāsekh* に関しては小牧「成立事情」にすでに指摘されている。
- (16) H. L. Rabino di Borgomale, *Album of Coins, Medals and Seals of the Shāh of Īrān (1500-1948)* ed. by M. Moshiri, Tehran, 1974, pl. 21.
- (17) いずれにせよ、この日にテヘランにアーガー・モハンマド・ハーンが入城したとする Hambly の説明は誤りである [“Āghā Muḥammad Khān,” 118].
- (18) Shāh Tahmāsp 2 世の孫にあたる。
- (19) なお、この史料ではアーガー・モハンマド・ハーンは Solṭān Ḥoseyn Mirzā の名前でフトバと貨幣打刻を行ったと述べたとされるが、少なくとも貨幣は見つかっていない。
- (20) Moḥammad Moshiri, *Sekkehā-ye Āqā Moḥammad Khān Qājār*, Tehran, 1351Kh., 17-18; H. L. Rabino di Borgomale, *Coins, Medals and Seals of the Shahs of Īrān (1500-1941)*, n. p. 1971, 62.
- (21) 1210年 Shavvāl 月の勅令は、Moḥammad Karīmzāde-e Tabrizi, “Chand Farmān-e Tārikhi,” *Barrasīhā-ye Tārikhā* 5-5 (1349Kh.), 182. 1202/1788, 1206/1792, 1207/1793年の勅令の例は M. A. Todua & I. K. Shams (ed.), *Tbilisskaya kolleksiya persidskikh firmanov*, tom 2, Tbilisi, 1989, 599-608.
- (22) 1211年 Moḥarram 月の勅令は、Moḥammad Reżā Naṣīrī (ed.), *Asnād va Mokātebāt-e Tārikhi-e Īrān: Qājāriyye*, vol. 1, Tehran, 1366, 289. ほかに1211/1797年の勅令の例は、Todua & Shams (ed.), *Tbilisskaya kolleksiya*, 609-612.
- (23) Perry, cv. Agā Moḥammad Khān, 604; Hambly, “Āghā Muḥammad Khān,” 129. これらの根拠は不明。
- (24) なお、Ebrahimnejad は、アーガー・モハンマド・ハーンのイラン国内諸勢力との闘争を重視し、ガージャール朝の成立をザンド朝滅亡の1794年におく。テヘランへの入城、および即位式については全く言及していないが、やや極端であるように思われる。Ebrahimnejad, *Pouvoir*, 19, 236-241.
- (25) 本田實信「イルハンの冬営地・夏営地」『東洋史研究』34-4 (1976), 93.
- (26) 羽田正「メイダーンとバーグ：シャー・アッバースの都市計画再考」『橘女子大学研究紀要』14 (1987), 179-180.
- (27) Moghtadar, “Téhéran,” 42.

- (28) Soltāniyye および Ūjān (今日の Bostān-ābād, タブリーズ南東 50 Km) がイル・ハーン朝時代から夏営地として用いられたことについては、本田「冬営地・夏営地」88, 93. Gondemān はエスファハーン南西約 100 km で、サファヴィー朝期に夏営地として用いられた。
- (29) Mo'tamedī, *Joghrafiyā*, 78.
- (30) 本田「冬営地・夏営地」87-89.
- (31) Khosh Yaylāq. 1230/1815年および1236/1821年 [*Zū al-Qarneyn* 413, 527].
- (32) Kinneir は「多数の人々が王の野営に従うと述べる」が、Olivier の言を踏まえれば、5 万人もの住民がすべてシャーに同行したとは考えにくい。
- (33) たとえば, L. Dubeux, *La Perse*, Paris, 1841, repr. n. p. 2004, pl. 34.
- (34) この記述は *Zū al-Qarneyn* 69 に始まるが、印刷ミスにより、校訂本では 1 頁欠落しているため、大英図書館の写本を参照した。*Zū al-Qarneyn II*, 25a-25b.
- (35) ノウルーズの歴史に関しては、A. Christensen, *Les types du premier homme et du premier roir*, Leide. 1934, 138-160; Javād Borūmand Sa'īd, *Nowrūz-e Jamshīd: Pāzhūheshī Novīn az Peydāyi-e Nowrūz*, Tehran, 1377Kh.
- (36) Moḥammad Ḥoseyn b. Khalaf Tabrīzī, *Borhān-e Qāṭe'*, ed. by Moḥammad Mo'in, Tehran, 1361Kh., 587.
- (37) Abū al-Qāsem Ferdowsī, *Shāhnāme*, ed. by Jalāl Khāleq-e Moṭlaq, New York, 1988, vol. I, 44. この部分の散文形式の邦訳は、岡田恵美子訳『王書：古代ペルシアの神話・伝説』岩波書店, 29.
- (38) この点は、以下の論文によれば、サファヴィー朝に関しては明確ではないようであるが、さらに広く史料を検討する必要がある。後藤裕加子「宮廷儀礼としてのノウルーズ：16世紀後半のサファヴィー朝宮廷とムガル朝宮廷の比較から」『人文論究』55-2 (2005), 100-106.
- (39) また、1249/1834年は病気のため着座を行わなかった [*Zū al-Qarneyn* 894].
- (40) Dūst 'Alī Khān Mo'ayyer al-Mamālek, *Yāddāshthāyi az Zendegāni-e Khošūši-e Nāsher al-Dīn Shāh*, Tehran, 1372 Kh., 54-56.
- (41) この玉座については Yahyā Zokā, *Tārīkhche-'e Sākhhtmānhā-ye Arg-e Saltānati-e Tehrān va Rāhnāmā-ye Kākh-e Golestān*, Tehran, 1349Kh., 150-162. 同時代の記述として、*Jahān-ārā* 189b-192a.
- (42) この玉座については Zokā, *Tārīkhche*, 87-110. 同時代の記述として *Jahān-ārā* 192a-194b.
- (43) 平野豊「ガズヴィーン遷都の年代比定：16世紀サファヴィー朝文化史再編の観点から」『イスラム世界』48 (1997), 37-53; Ch. Melville, "From Qars to Qandahar: The Itineraries of Shah 'Abbas I (995-1038/1587-1629)," in J. Calmard (ed.), *Études Safavides*, Paris/Tehran, 1993, 195-224.
- (44) S. Babaie, "Safavid Palaces at Isfahan: Continuity and Change (1590-1666),"

Ph. D. Dissertation, New York University, 1993, 308-314.

- (45) 後藤裕加子「サファヴィー朝ムハンマド・フターバンダ時代の宮廷と儀礼」『西南アジア研究』61 (2004), 40-41, 表1。ただし、この表で単に「記載なし」となっている1006/1598年には(イスファハーン), 1010/1602年には(マシュハド)を加えるべきであろう。
- (46) Babaie, "Safavid Palaces," 240.
- (47) 製作に関する年代記の記述は *Zu al-Qarneyn* 876-878. モデルとしたペルセポリス等の古代イランのレリーフを、ピーシュダーティー朝からムハンマドの召命まで、あるいはそれ以降の先王達 (salāṭin-e sābeq) のものとしている。このようなガージャール朝期の古代風のレリーフに関しては, J. Lerner, "Sasanian and Achaemenid Revivals in Qajar Art," in V. Sarkhosh Curtis et al. (ed.), *The Art and Archaeology of Ancient Persia*, London, 1998, 162-167.

史料一覧

- Donboli*: 'Abd al-Razzāq Donboli. *Ma'aṣer-e Solṭāniyye: az ru-ye Noskhe-e Mūze-e Boretāniyā*. ed. by Firtūz Maṣṣūrī. Tehran. 1383Kh.
- Duprē*: A. Duprē. *Voyage en Perse, fait dans les années 1807, 1808 et 1809*. Paris. 1819. tom 2.
- Eksir*: 'Alī Qolī Mīrzā E'tezād al-Saltāne. *Eksir al-Tavārikh*. ed. by Jamshīd Kiyānfār. Tehran. 1370Kh.
- Fārsnāme*: Hāj Mīrzā Ḥasan Ḥoseynī Fasā'ī. *Fārsnāme-e Nāserī*. ed. by Maṣṣūr Rastegār Fasā'ī Tehran. 1367Kh.
- Favā'ed*: Abu al-Ḥasan Qazvīnī. *Favā'ed al-Ṣafaviyye*. ed. by Maryam Mīr Aḥmadī. Tehran. 1367Kh.
- Fehrest*: Reżā Qolī Khān Hedāyat. *Fehrest al-Tavārikh*. ed. by Mīr Ḥāshem Moḥaddes & 'Abd al-Ḥoseyn Navā'ī. Tehran. 1373Kh.
- Golestān*: Asnād-e Kākh-Mūze-e Golestān.
- Golshan*: Abū al-Ḥasan Ghaffārī Kāshānī. *Golshan-e Morād*. ed. by Gholām Ḥoseyn Ṭabāṭabāyī Majd. Tehrān. 1369Kh.
- Jahān-ārā*: Mīrzā Moḥammad Ṣādeq Marvazī. *Tārikh-e Jahān-ārā*. MS. British Library. Add. 22697.
- Khold*: Moḥammad Yūsof Vāleh Qazvīnī Eṣfahānī. *Irān dar Zamān-e Shāh Ṣafī va Shāh 'Abbās-e Dowvom: Khold-e Barīn*. ed. by Moḥammad Reżā Naṣīrī. Tehran. 1380Kh.
- Kinneir*: J. M. Kinneir. *A Geographical Memoir of the Persian Empire*. London. 1813. rep. New York. 1973.
- Malcolm*: J. Malcolm. *The History of Persia from the most Early Period to the Present*

Time. New Edition. London. 1829.

Moḥammadī: Moḥammad Faṭḥ ollāh b. Moḥammad Taqī Sāravī. *Tārīkh-e Moḥammadī: Aḥsan al-Tavārīkh*. ed. by Gholām Ḥoseyn Ṭabāṭabāyī Majd. Tehran. 1371Kh.

Molk-ārā: Mīrzā ‘Alī Qolī Eqbāl Cholāvī. *Tārīkh-e Molk-ārā*. MS. Ketābkhāne-e Malek. no. 4161.

Montażem: E’temād al-Saltāne. *Tārīkh-e Montażem-e Nāşeri*. ed. by Moḥammad Esma‘il Reżvānī. Tehran. 1363-1367Kh.

Nāsekh: Moḥammad Taqī Lesān al-Molk Sepehr. *Nāsekh al-Tavārīkh: Tārīkh-e Qājāriyye*. ed. by Jamshid Kiyānfār. Tehran. 1377Kh.

Olivier: G. A. Olivier. *Voyage dans l’Empire Othoman, L’Égypte et la Perse*. Paris. 1807. tom 5.

Porter: R. Ker Porter. *Travels in Georgia, Persia, Armenia, Ancient Babylonia &c. &c. during the years 1817, 1818, 1819, 1820*. London. 1821. vol. 1.

Rowżat al-Şafā: Reżā Qolī Khān Hedāyat. *Malḥaqāt-e Rowżat al-Şafā-ye Nāşeri*. Tehrān. 1339Kh.

Şāleḥ: Mīrzā Şāleḥ Shīrāzī, *Majmū‘e-e Safarnāmeḥā-ye Mīrzā Şāleḥ Shīrāzī*. ed. by Gholām Ḥoseyn Mīrzā Şāleḥ. Tehran. 1364Kh.

Şāhebqerānī: Maḥmūd Mīrzā Qājār. *Tārīkh-e Şāhebqerānī*. MS. British Library. Or. 2876.

Zū al-Qarneyn: Mīrzā Fazl-ollāh Shīrāzī Khāvarī. *Tārīkh-e Zū al-Qarneyn*. ed. by Nāşer Afshārfar. Tehran. 1380Kh.

Zū al-Qarneyn II: Fazl-ollāh Khāvarī, *Tārīkh-e Zū al-Qarneyn*. MS. British Library Or. 3527.